

マイノング主義論理におけるボトムアップの観点

小関 健太郎 (Kentaro Ozeki)

慶應義塾大学

1905 年の論文「表示について」において、ラッセルは「マイノングの理論」——対象論について、いくつかの難点を指摘している。すなわち、マイノングの理論によれば、表示句は常にそれに対応するような対象を指示するが、それはそれ自体で「困難のある立場 a difficult view」であり、また例えば「円形の四角形」を認め、「円形の四角形は円形である」と「円形の四角形は円形ではない」が共に真であるとするならば、これは無矛盾律に反する。ラッセルは記述の理論によってこうした問題が回避されることを示し、記述の理論によるマイノング的理論の克服という考え方は 1948 年のクワインの論文においても受け継がれ、その後のメタ存在論のいわば「標準見解」の一部となった。しかしながら一方で徐々に、特に 1980 年前後をひとつのピークとして、マイノングの対象論に意味論的な着想を得た論理が再び注目されるようになり、こうした論理はマイノング主義意味論 Meinongian semantics やマイノング主義論理 Meinongian logic と呼ばれている¹。

ラッセルの批判に対する応答としてのマイノング主義論理という背景は、記述や指示といった問題の側面からマイノング主義論理を特徴づけるひとつの動機となっている。しかしながら、マイノングの本来の対象論的考察や、昨今のマイノング主義論理の展開は、マイノング主義論理についてのもうひとつの観点を示唆している。本発表の目的は、マイノング主義論理について、しばしば日常言語や志向性理論に関連づけられる記述や指示の問題とは異なる側面からの見方として、より存在論的側面を重視した見方を提示することである。

本発表ではまず、マイノング主義論理に対するこれらの 2 つの見方、すなわちトップダウンの観点とボトムアップの観点の区別を提示する。2 つの観点は具体的な遂行において多くを共有しているが、寛容な包括原理の擁護を出発点とするトップダウンの観点に対して、ボトムアップの観点では対象領域（対象世界）に対する様々な新しい対象のタイプの導入が第一義的な課題となる。そこで、その主な例として、ギャップ対象などいくつかの対象のタイプを検討したい。さらに、ボトムアップの観点においては、現実に存在する対象の導入や対象世界として現実世界を考慮することによる制約の付加を、その他の新しい対象のタイプの導入とは独立の問題として位置づけることができ、核性質/核外性質の区別といった既存のマイノング主義論理の諸方法をこの点で捉え直すことができる。最後に、ボトムアップの観点においてもたらされるいくつかの新しい方向性を提示する。特に、対象の

タイプの導入という観点によって、既存の複数の異なるマイノング主義論理のアイデアの組み合わせが有意味な内実を伴った仕方で可能になることを論じる。

(1) cf. Berto, F. and Matteo P. (2015). *Ontology and Metaontology*. Bloomsbury.